
赤のマニキュア工場

にしんももこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤のマニキュア工場

【Nコード】

N9921A

【作者名】

にしんももこ

【あらすじ】

赤いマニキュア工場で男達は黙々とマニキュアを作ります。

（前書き）

小説じゃなくなってしまうたかもしれません……

りんごの皮と、少しの湧き水だけを使う小さな工場には、赤にとても映える、白い作業着を着た男が数人働いているだけで、あとは同じように白い巨大な機械が一台あるだけだ。

男の作業着も、巨大な機械もただ白くぼんやりと光ってみえる。

機械から伸びるホースからは、かつてはりんごの皮だったものが、熱によって溶かされ、ろ紙によって透かれ、不純物のない液体となつてドラム缶の中に落ちていくのが見える。

ひとりの男は、それを決められた量だけストローで吸い上げ、小さな透明の瓶に吹き落とし隣の男に渡す。

もうひとりの男は、その瓶に刷毛の付いた蓋をつけてダンボールの中に、右端からひとつづつ入れていく。

それを繰り返すことが男たちの仕事だ。

それぞれ役割が決まっていて、その役割は入社年数によって分けられている。

単調な仕事だが文句を言うものはいない。

工場内はきまつてとても静かで、もちろん仕事中は男たちが話すことはない。

聞こえるのは機械の動く音と、男の手が動く音だけだ。

仕事とはそういうものである。

やがて工場内に単調な音楽が流れ出し、男たちは手を止める。

お昼の時間を告げる音楽だ。音楽は15秒ほど流れたかと思うとピタリと止まった。

いつもと同じゆるやかな時間が始まるのだ。

男は機械を止めて白い部屋から出て行き、妻が作ってくれた些細な弁当と、皮のすっかり剥かれたりんごを齧り、うれしそうにニッと笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9921a/>

赤のマニキュア工場

2010年12月26日22時15分発行